

新型コロナ禍にはほとんど辟易しつつ、あわよくばそこから何かしら「希望」を見出せないかと、ずうっと思案してきた。その結果、いったん私が見出した「希望」とはどういうものか。

それはいつ叶うとも知れぬ経済第一主義からの転換が、人類の自発的選択ではなく、感染症拡大という強制力にねじ伏せられる形で実現する。そのことで温暖化の危機はいくらか緩和される、というものだ。後手にまわるゆえの、さらなる混乱と犠牲の先にもたらされる「希望」である。

その一方で、加藤三郎氏の新著『危機の向こうの希望』にはこうある。「コロナ危機では、人々や行政の対応が一変した」「それならば、環境の危機に対しても、その恐るべき脅威を多くの人々が実感をもって認識できるよう、説明や広報の仕方を工夫するなどすれば、人々の行動も政治のプライオリティも劇的に変化するはずだ」。人類の理性をあきらめない。人類のはしくれとしては、こちらの「希望」こそを追求すべきだろう。

それでは、どんな「説明や広報の仕方」が有効なのだろうか。まずそれは新しい感染

症の流行と地球環境の不安定化を、別個の脅威と見てそれぞれに対処するのではなく、その二つが実は同じ源から発したものであることを示す。そのような解き明かし方なのだと考える。そうすることで、コロナ禍によく身構

## 二つの危機のあいだ

人間のための合理へ その4

十文字 修

(じゅうもんじ おさむ)

新潟県佐渡島在住

えることのできた人びとは、そのまなざしを、環境の危機にも向けることになるのではないか。

でも、それだけでは足りない。より大事なことがある。多くの人びとが、環境の危機を「恐るべき脅威」と実感できない、その本当の理由は何だろうか。それは私たちが、自分自身の幸福の射程を、個としての人生せいぜい数十年にしか持っていないから。その利

那を直接おびやかしたから、新型コロナは恐るべき脅威なのであり、一方、今日や明日にいのちを奪われない(ように見える)環境の危機は、いまだ他人事なのである。過去から未来へのながい時間の流れに、個としての自分の持ち時間を重ね合わせるという感覚。その実感を取り戻すことで、私たちは環境の危機を自分事のできるのではないか。このあたりは、加藤氏はじめ環文の皆さんが力説する、日本の伝統的価値観の見直しにも通じると思う。

めまぐるしく変転する情報と刺激で風景が成り立つような今日にあって、いかながら時間軸へのコミットを取り戻すか。鈍感な私などは、先人の気配濃い土地で暮らしと仕事を果たし、毎日の出勤時に自宅の裏手に聳えるおおきな山を一瞥するといった習慣のなかで、ようやく、自分の持ち時間をこえる意識をいくらか持ち始めた気がする。

まず、そういう自分に仕立て直すということ。各自その工夫をするということ。それは、環境の危機を克服するための十分条件ではない。しかし欠くべからざる必要条件である。